



423
363

特250

848

記念會叢書第七輯

藤井甚太郎謹話

明治天皇と其の時代

長野市聖徳記念會

始



特250
848

前書



長野市は明治十一年北陸東海兩道御巡幸の御途次長くも御二泊の光榮を擔ひたり。目の當り天日を拜したる住民の感激は年革まると共に常に新にして、遂に去る昭和九年本會の創立を見るに至れり。以來九月九日の記念日には大勸進を會場として市民參集し、記念式典を嚴修し御膳水を拜戴し御物を拜觀すると共に、御聖德に關する講演會を開催し、或は本會の支會たる聖蹟巡禮團は毎年日を選びて聖蹟巡禮行脚を舉行し、昨年は木會宮ノ越より須原まで八里を巡禮する等、御聖德奉戴の心を維れ新にするに勉め來れり。

本冊子は昨年九月九日の記念日、城山の藏春閣に於て行はれたる講演の速記にして、講述者は維新史料編纂官にして京都帝國大學講師たる藤井甚太郎氏なり。

昭和十七年二月一日

明治天皇聖德記念會長 石垣倉治謹記





明治天皇と其の時代

藤井甚太郎謹話

一、序言

私が只今御紹介を蒙りました藤井であります。私は「明治天皇と其の時代」と題してお話申し上げます。

今日は御承知の通り、非常時、而も超非常時と云ふ言葉を以て、表はされて居ります時代である事は、皆さんが十分に御承知になり、御心構ある事と存じて居るのであります。斯う云ふ時代に當りまして、かの偉大なる時代であります。「明治時代」を其の時代を指導遊ばされた明治天皇陛下の御事蹟を追憶致しまして、我々は何等か新なる大きな力を得ます事は、誠に我々の有難く存じ上げる所であります。

此の明治天皇の御事蹟を拜します事に就きまして、私が聯想致しまする事は、あの獨逸が今日の非常なる力を發揮致して居りまする原因、即ちフレデリック大王の事蹟の追想と云ふ事であります。

二、獨逸再起の精神力

今を去る事約十年前、千九百三十年の冬に私が伯林に居りまする時は、丁度今のヒットラー氏のナチス黨が未だ今日の様な勢力を得なかつた時ではありましたが、愈々立ち上らうとして居た時で、あの時と云ふものは歐洲大戰の後を受けまして、獨逸は極度に疲弊致し、物資に於ても缺乏致して居りまするし、非常に國民が窮屈な暮しを致して居る時でありましたが、此の時に獨逸は如何様な氣持である時代を切り抜けたかと申しますると、之は結論から申しますれば、實は獨逸歴史の懐古のみであつたのであります。或る晩私は伯林の活動寫眞を觀に參つたのでありまするが、其の映畫はフレデリック大王が中心人物でありますかの横笛の映畫でありまして、第一にポツダム市のサン・スー・シーの宮殿に於て、大王が好んで居りまする横笛を吹いて居る場面が出て參ります。次の畫面は其の隣の部屋の場面で、重臣が會議を致して、ザクセンに向つて宣戰を

しなければならぬと云ふ事を評議致して居る。非常に心配さうな顔付で重臣が論議をされて居られます畫面でした。其の次の場面には、フレデリック大王が悠々迫らざる態度を以て横笛を吹いて居られます。そして重臣共が會議を致して居りまする所へ、どうかお出でを願ひたいと、幾度か使が參りますけれども、一曲の終る迄は悠然としてゐられ其の曲を吹き終つて、靜かに其の横笛を机の上に置き、そして重臣會議に行つてザクセンに對する宣戰の布告をする。斯う云ふ筋合ひであります。其の次の場面は、大王が高き丘に登られて、丘下の普國大軍を閱兵せられます。其の閱兵の場面が出て參りますと、此の活動寫眞場に於て、今迄靜かに觀て居りました獨逸の觀衆は、もう堪へられ無いと云ふ有様で手を拍きまするし、足を踏み鳴らして非常に熱して來るのであります。私も野次馬の氣分を多分に持つて居りますので、仲間に入つて手を拍いてみたり、足を踏み鳴らしたりしたのであります。之は何う云ふ氣持であるかと申しますると、丁度千九百三十年の頃でありますから、かの勝ち誇つて居りまする佛蘭西の兵が、獨逸の民族の憧れの場所と致して居るライン河畔に駐屯致して居ります。而して國內には金も物資も無く、大砲も兵隊の數もヴェルサイユ會議に依つて制限を受けて居ります。殆ど手が出せ無いと云ふ状態にあつたのです。でありますから、何とか此處を切り抜けなければならぬと思ひまするけれど

も、物資は無いと云ふ有様でありますから、唯彼等の力になるものは、我々の先祖にも斯う云ふ偉い人があつたのである。前代は斯う云ふ偉い人が國を興されたのであると云ふ過去の歴史の追憶のみに依つて、國の存在を意識して居るのみであります。此の獨逸民族の崇拜の的になつて居ります者はフレデリック大王であります。斯う云ふ様な有様で、今日の獨逸ナチスが立派に勃興し、今日の大なる事業を爲したのであります。斯う云ふ状態を考へてみますると、歴史の追憶と云ふ事が非常なる力を持つて來るのである事が判ります。

日本は今日非常時と申しますが、あの頃の獨逸の疲弊より振ひ興ります力と云ふものは、極度のものであります。さう云ふ様な非常な逆境に陥つてゐたのが僅かの中に、今日のあの獨逸の力を興し得たのであります。御承知の如く、ヴェルサイユ會議の調印があつた屈辱的な、而も償金をと申しますると、其の當時普通に申します如く、天文學的數字と云ふ莫大な償金を科せられました。獨逸のマルクは非常な下落を致して居ます。よく世間で申します、夕刊賣りが新聞を抱へて之を賣りに街へ行つて來る。歸りには夫と同じ位の分量の紙幣を持つて歸らねばなりません。其の位に紙幣の値打は下つた。斯う云ふ時代であります。紙幣下落の一番極端でありましたのが千九百二十四年頃であります。其れが今日の如く勃興したと云ふものは、一に歴史の追憶に原由

して居ります。

我々は明治天皇様の時代を追憶致しまする事に依つて、非常に其處に力を得る所があるのであります。

三、明治時代の意義

然らば明治天皇様のお治め遊ばされた明治時代は、如何なる時代でありましたでせうか。斯う云ふ事を考へてみますると、之はつまり我日本の國が、あの四國、九州、本土等の大八洲の國の名を以て現されて居りました所の日本からして、東洋の日本となり、夫から世界の日本となりました其の一變時代であります。

二千五百年間の歴史には、朝鮮征伐と云ふ様な事もありませんでしたが、大體は大八洲國の中に行はれて居りました歴史であります。今日の歴史即ち今日の日本と云ふものは、佛印とか或は蒙古の地、或はシベリアの境迄日本人が活動して居るのであります。換言すると、大八洲の歴史から世界を舞臺とせる日本歴史に移ります過渡の時代が、明治天皇様の御治めになつた時代なのであります。従つて明治時代は、之は日本の歴史に於て極めて有意義である許りでなく、東

洋の歴史上に於ても亦有意義でありますし、尙之を世界の歴史に於ても有意義と云つてよいのであります。世界の歴史から見ますれば。世界人の眼に留まらなかつた所の東洋の小さな島國、其の日本が、段々大きくなつて、東洋に於てはどうしても日本を無視してはならぬ。日本の諒解を得なければ、東洋に於て何事も仕事が出来無いと云ふ日本となり、遂に今日の如く世界を動かす日本の力が世界の中に、確立致しまする迄に至る、其の第一歩の時代であります。所謂今日の日本の出来まする基礎の時代。之が明治時代でありまして、明治天皇の御聖代は、非常に有意義な歴史を以て現れ來たのであります。

恐らく之から後に、百年經ち、二百年、千年經つて考へて見ましたなら、我々が神代の歴史、即ち天照大神を始め奉り、神代の八百萬の神々の事柄等を、我々が今日考へますと同様に、今後の日本人は明治時代の人々を考へると思ひます。従つて明治時代は、千年、幾千年、永劫に日本の國のあらん限り、日本人の續く限り、非常に大きな意味合ひを持つて來るのであります。實に之は偉大なる時代であつたと思はれるのであります。

四、今日の由來する所

今日我々がよく世間の人から「時代を眞面目に認識しろ。」と云ふ奴は時代がよく判ら無い。」と聞くのであります。何故に今日の時代を認識しなければならぬかと申しますと、よく世人は、「空襲があるから。」とか「之から先はどうなるんだ。」とか、左様な言葉で以て表はしてゐるのであります。夫は將來の事でありまして、之は皆先々に起る事件を考へてのことです。然し今日の時代は何う云ふ時勢であるか。之を本當に認識する事は、之は明治時代の歴史を本當によく知らなければ、其處に確とした時代を認識した心構へは出来無いと思ひます。樞軸國の運命はどうなるだらうとか。目下日本はA B C Dの國々から包圍されて居るのだ。斯う云ふ事で、現代を認識する事は、私は十分徹底する迄には出来無いと思ひます。本當に心の底から、今日の時代を認識するには、何としても今日の時世の生れ出た所をよく見なければ、今日の時世に對する心構へは出来無いと思ふのであります。

昭和十五年十二月十二日、光格天皇の御百年祭が宮中にて行はせられました。其の時私は誠に光榮でありましたが、兩陛下の御前に於まして、一時間四十分間に亘つて、御進講を申し上げ、御茶を拜受し乍ら、御治世の事を申し上げます。其の時、陛下に

「實に光格天皇様に、今上陛下の此の治世に於る、此の日本の國の發展して居る事を御覽に入

れたいと存じます。之は出来無い事でありませけれども、御覽に入れられない事が、如何にも残念に存じ上げます。然し乍ら今日の時勢が斯う云ふ風になつて参つたと云ふ事に就き、光格天皇様の御代からの、日本の歴史をよく見て、始めてよく今日の時代が判る事でありまして、今日の御治世に於る國民の覺悟と云ふものは、光格天皇様の時代からの歴史を顧みて、始めて確固たる心構へが出来るのでござりまする。」

と、陛下に言上致しました。

同様に、明治時代をよく知らなければならぬのであります。さうで無ければ、今日の時世ははつきり出て来ないと思ひます。殊に今日列席の皆さんは若い御方が多いのであります。明治時代を経て、今日の時勢には何う云ふ譯で出来て来たのであるかを、十分呑み込んで戴きたいと思ふのであります。

人間は如何に長生しても、一生は七十年か八十年であります。支那人は人生五十年と云つたがそれ丈の間に、各自は目先の事許り考へず、國の生命は永遠なものであるからして、人の一生を通じて永遠なるべき國家の目標を誤つてはいけ無い。是非近代の歴史から考へねばならぬと云ふ心構へを、之から先の人は特に持たなければならませぬ。

獨逸は今焦つて居る。露西亞との戦ひをしてゐるが、少し待つてゐてやれば良いと私は思ふのですけれども、兎に角人の一生と云ふものは、五十年で終ると云ふ様な事で、ヒットラーが焦つて來てゐる様になりますと、宜しくない。此と同様に若い諸君は、明治の初めの歴史を見て、十分に今日の時世を呑込んで戴きたいと、私は考へて居るのであります。然らば明治時代は、何う云ふ時代であつたでせうか。其れを見るには、其の明治時代になります前の時代、即ち江戸幕府時代をよく見なければならませぬ。つまり今日を知る爲に明治時代を、而して更に其の前の時代を知らなければなら無い。

五、江戸時代とは

此の徳川時代と云ふものがです。之が又、現代の日本の政治の状態と似ては居ないかと思ひます。江戸時代は經濟に於て、或は金融上に於て、或は米とか物資の配給とか、將又人に於ましても、藩と云ふものが一つの單位をなして居ました。今日は一縣の物資中、或るものは隣縣には出さないと云ふ様な風に、兎も角縣が地方の一つの經濟單位をなして居ります。之は今の時世であります。夫と同様に一つの藩を單位として、社會を保たれたのが徳川時代であります。即ち今日

の縣と申しまする代りに、徳川時代には藩と云ふものが各地にありました。長野縣下に於ましては、飯田藩、松本藩、夫から須坂藩、高島藩、岩村田藩、高遠藩等があります。其の他、其等藩々の間には、中野など代官領が入つて居ります。そして藩とは制度を異にしてゐました。當時の經濟單位は、御承知の如く金で無く米であります。そして其の需要供給が經濟の基調をなして居ります。今日行はれてゐます他の縣へ米を出さ無いと云ふ事は、昔でもさうであります。殊に舊幕時代では、年貢米を上納しませぬ前に新米を他藩領に渡す事は、絶対に禁ぜられて居つたのであります。

一例を申しますと、之は九州の話であります。福岡藩、之は五十二萬石の大きな藩であります。此の藩の寛政の達しを見ますと、「上納の米を納めない前には、領内の米を他領に渡してはならぬ。」と云ふ事を嚴重に達して居ります。所が藩内遠賀郡に住む一人の魚賣りが、魚を膽いで或村に参りました。其の時に掛錢がある。其の掛賣代として米一斗を貰ひました。夫を擔いで來ます時に、隣藩である小倉藩主小笠原氏の領民で、蜜柑籠を背負つて果物買を業と致して居る者が其處を通りかゝつて、魚賣の米を見て、何うか自分に譲つてくれと云つて米を譲つて貰ひました。そして蜜柑買ひが其の米を持つて自分の村へ歸らうと致しました時に、夫を見付けた近所の

農民が捕へた。其の事が郡奉行の耳に入つて審理沙汰となり、此のいきさつの爲に、始めに米を貰ひ隣藩の果物買ひに賣りました魚屋は、三日間若松の町に晒しものになつて處罰を受けました。

此の位、一つの藩内から物資を他藩に渡す事は、嚴禁でありました。

藩内の物資其れを日常使用して、他藩の物品を買つてはならない。又他藩には出さない。斯う云ふ様な組織になつてゐまして、世の中が小さく各藩にきざまれ、地方に一つの經濟單位が出來て居たのであります。大體は斯様な點も今日の時代によく似て居るのであります。

六、侍から國民皆兵へ

夫から時代の組織が、之が今の時代とよく似かよつて居るのであります。徳川時代と云ふものは、根本的に申しますと、之は所謂戰時狀態である。何時でも戰爭があるんだと云ふ建前、其の氣持で居る。そして戦ひを常職と致します所の侍が城下に居住致して、農業、商賣を致してはならないのです。唯戰爭があれば、君の御馬前にて討死の覺悟の下に、平時も常に武藝を嗜み、そうして今日の勞働と云ふ事をしないで武家屋敷に居ります。そして何時か戰爭があるんだ

と云ふ覺悟。所謂臨戰狀態、所謂動員計畫の下に江戸時代が組織されて居ります。そうして侍が矢張其の心構へでありまして、何時も妻子に愛着を持つてはいけない。又金錢に執着を持つべきでない、と之が所謂武士の建前であります。

夫も二、三年位動員が續いたのなら宜しいのでありますけれども、實は徳川三百年間動員を續けて居る。そして實際世の中は臨戰狀態に出來て居るけれども戦争が無い。幕府の言分では、徳川家の御威光が盛であるから、戦争が無いのだ。有難く思へと云ふ、之が政治態勢であります。つまり動員計畫を三百年間續け、實施した理でありますから、社會が疲勞して終つて居る。之は大きな社會問題であります。此れが江戸時代の衰へる原因であります。そして侍と云ふものは、つまり生きんが爲に生きるのでは無く、死なんが爲に生きて居る。何處で死なうか恥づかしくない所で死なうと云ふ、之が三百年侍の心構へで續けて來て居るのであります。

斯う云ふ社會組織は今日の政治狀態と非常に似て居るものであります。さう云ふ様な情勢であつたのが、明治時代になりますと之が組變へられました。此處に一つの大きな明治時代と云ふ意味が生ずるのであります。

然らば、百姓とか商賣人とか申す者は、社會上如何様な役目をするかと申しますと、商賣人は

所謂軍資金を負擔しなければならぬ。夫から軍用の米、軍の兵糧米は百姓が負擔しなければならぬのであります。然も大金が入用と申しますと、大阪京都の富豪に御用金を申し付ける。つまり戦ひをする者と、生産に従事する者と、世襲的に全く之を分けて居りました。之が江戸時代であります。

所が明治の時代になりますと、さう云ふ様な制度を止めて國民は皆兵だ。斯う云ふ風に組織が變つて來たのであります。即ち兵農分離から、國民皆兵に變つて來ました。之が一つの明治時代の特徴であります。此の時代の過渡期に一つの現象が起る。

例へば家を重んじなければならぬから、明治の初年には長男丈徴兵を免除するとか、種々の制度がありました。

先程申上げました如く、江戸時代に於て社會の中堅をなし、世襲して居りました所の侍階級と云ふものを明治時代に於て全然無くして了つて、そして國民皆兵と云ふ事にきまりましたのであります。此處に一つの問題が起つて來ましたのは西南の役であります。明治十年に起つた西南役。あの時は未だ落ちぶれて居ります侍が諸方に居る。明治の御代になりましたも、斯様な御世になるつもりでなかつたと云ふ考へを致して居る所の不平士族が各地に居ります。明治七年

の頃から佐賀の亂。前原一誠の萩の亂。之等が続いて起りました。そして其等が何れも失敗に終りました。其の結果明治政府の勢力は偉いものだ。鎮臺兵は強いもんだ。農民から取り立てた兵隊であるけれども、存外強いものであると考へられたのでありますが、明治十年の役は、徳望の非常に高い南洲先生が明治維新の功に誇つて居る薩日隅三州の健兒を率ゐて立つた戦争であります。夫を各地の侍が見て、今度南洲先生が兵を率ゐて立たれると云ふので、さう云ふ昔の事を夢みて居ります所の人々も参加しようとする。熊本城が落ちたら俺も起つのだ。熊本城が抜けたならば此處、かしの不平人が起つと云ふ、これがあの西南戦争の状態でありますから、陸軍に於ましても西南に兵起ると聞いて、非常に心配し兵隊を十分に準備しなければならぬと考へました。そして敵が西南にゐるのに、第一着の準備は東北地方に敵ありとしての準備でした。其の時に鎮臺の兵丈では足りない。其處で今迄は一旦侍階級を廢して了ひましたけれども、士族を又兵隊に取り立てた。此の時に木戸孝允等は、非常に議論があり、折角階級制度をなくして了つて、そして百姓であれ日本人である以上、皆兵でなければならぬとした制度が今出來てゐる時、又三百年の縁故を有つて居る侍階級を用ひて復活すると云ふことは容易ならぬ事になる。殊に戦争が濟んで了へば戦争に勝つた後に於て、此の人達に恩賞を考へなければならぬ。此處に考へを

及ぼしまして、之は生半か募集するもので無い。と云ふ議論もありましたのですけれども、昔の侍を募集致してそして一つの旅團を組織致しました。而して又心配は戦争に勝つたならば此の士族達の恩賞を何うするかと云ふ問題でありましたが、之は實は杞憂でありまして、十年の戦争が終りました後、吹上御苑に御召しになり、御慰勞の御沙汰がありましたので皆が感極つて、恩賞の事などは考へず誠に感激致して、皆歸職致して終ひました。此處が日本の有難い所であると私は思ふのであります。皇室の御稜威。夫は日本の國の事丈でありまして、斯う云ふ事は外國では其の例がありません。誠に有難い國であると私は考へて居るのであります。

戦争と云ふ事を一つの仕事と致して居る所の徳川時代の侍階級を全く無くして終つて、國民皆兵の明治時代となりましたが、此等侍の立場でありました藩。之が明治の二年になりました、版籍奉還と云ふ事を各藩主が致して、各地の大名が皆自分の持つて居りました所の領地、人民を皆朝廷にお還し致し、次いで明治四年になりました、廢藩置縣を行つて藩が全くなくなつて了ひました。

端的に申せば、己れは飯田藩堀家の家來である。己れは松代藩の眞田家の家來であるとか、やれ己れは上田藩の家來であるとか云ふ様な考へがなくなつて、誰も天皇直々の民であると云ふ事

にしなければならぬ。又土地に就ては此の土地は松代藩の領地であつて、眞田家の祖先が徳川氏から貰つたのであると云ふ様な考へを全く離して了つて、そして藩士の家は東京に引上げて終ひ、其の領地人民は、皆之は陛下の土地人民となつて了ひました。

斯う云ふ大變革が一滴の血も流さないで行はれる事は、今日外國に於て見出す事の出来無い所の一つの歴史事實であります。昔のフランスでありますとか、獨逸でありますとかの國々に於ては、大きな皇帝と云ふ様な人が、地方に居ります所の何々大公とか云ふ者の領地を一筋に收めようとする、必ず血を流して後に其れが出来る。然るに日本に於ては、之は日本全體が皇室のものであるからと云ふので、藩主が皆自分の持つて居ります領地、人民を、朝廷にお返し致しました。之が明治四年七月で、藩が全く無くなつて了つたのであります。

斯う云ふ風にしまして、所謂土地人民の總てが皇室の下に收められて了つたのであります。さう云ふ様な事が明治時代の一つの大きな特徴になつて居るのであります。

藩主の私有の様な土地人民を御返しすると云ふ藩が出来て参りましたものでありますから、或者の如きは自分の私有財産を皆朝廷にお返し致しませう。と建白を上つた者も出来て参りました。

總て皇室に歸一すると云ふ事が、明治時代の始めに於て行はれた、一つの歴史事實であります。

七、四民平等

夫から他に、明治時代の特徴が出て参りますものは、階級制度の打破であります。一例を申し上げますと、津輕藩でありますが、明治三年十月、藩主津輕承昭が自分の領内であります木作村に参つて、其の附近で土地を澤山持つて居ります所の百姓、地主を集めて達しを出した。「我々藩主も此度戴いてゐた土地人民を朝廷にお還しした。であるからお前達農業をやつて居る百姓の方でも、澤山土地を持つて居る者は、餘田を皆藩主にお還ししろ。勿論夫は只で取り上げる譯では無い。代金は出すけれども。其の差出した田地を、城下に居る侍に興へる。すると侍が其の土地に土着する。今迄百姓と云ふ者は侍に對して、交際は出来なかつたが、今度はお前達の隣近所に侍が来て交際が出来る様になる」と達して津輕藩農民所有の餘田を藩主が收めて居るのであります。其の時の達しを見ましても、「之から先は皆働くんだ。今迄侍と云ふ者は唯働かずして祿を貰つて居つたのであるが、之からは皆働くのだ。貴賤勞逸を異にせず。」と申して居る。今日八ヶ

ましい一億皆勞と云ふ主義であります。

夫から高知藩の達しを見ますと、「人民平均之理」と題して百姓であれ、商賣人であれ、人に變りはない。人に差別を付けてはならぬ。士農工商は職業の区分であつて、貴賤を區別するのではないと、斯様な事で明治時代は舊制度を滅して終つて、夫が新しくどんどん大きくなり、今日の日本となつて来て居ります。

今申上げました如く、侍はつまり戦争と云ふ事を致して、夫を家の職業と心得、そうして世襲をして来て居る。夫を今度は罷めて終つて皆働くんだ。そしてお前は商賣人になれ。お前は百姓をしろ。夫で暮しをやるんだぞ。斯う云ふ事を命じて居ります。之は今日種々の轉業があります。之は百八十度の轉業であります。元來侍は百姓を切捨御免で宜敷いのだと云ふて、三百年間習はしとして来てゐますが、其の侍に向つてお前達は明日から農業で一生働かなければならぬと、轉業を命じて居る譯であります。此れを歸農と申してゐます。

併し乍ら素々侍は劍術はして居りますけれども、所謂牛馬と共に働くと云ふ事は出来ない侍でありますから、不平許り言つてゐる。ブラジルに行きますとか、或は北アメリカ、滿洲と云ふ様な所に行く事が出来ます時代なら、何でもないのでありますけれども、當時は未だ其處迄行け無

い時代でありますから、各地の原野に開耕に従事せしめるより外に途はないのであります。那須野原とか安積即ち安達ヶ原の開墾、遠くはアイヌが居ます蝦夷地、即ち北海道に行くより他に途が無かつたのであります。

侍が諺の中に、「安達ヶ原に鬼住めりと聞きにし。」と云うて他人事の様によい氣持で諺つて居つたのに、今度は自分等が其の地に行かなければならぬ様になつて来て居ります。斯う云ふ様な非常に大きな犠牲を拂つて来て出来たのが明治時代であります。

斯様な大變革を切り抜けて、無事に新しい日本が出来たと云ふ事は、全く皇室がゐらつしやつたからであります。兎に角、斯様な歴史事實を外國に行ふと致しまするとなりますと、之は兎に角何萬人の犠牲を出さなければ出来ないのであります。其れが流血の慘を見ないで出来たと云ふ事は、之は全く日本の國の有難い所でありまして、皇室のあらせられて始めて出来たのであります。此處は餘程考へなければならぬと思ふのであります。

如何様な譯でさう云ふ風に此の世の中が變つて来るか。即ち何故に、斯くも美事な國內整備が出来たか。其れは今一つ理由があります。

八、對外觀念

物理で云ひますと、力學、御承知でありませう。物體がありまして、それに他から力を加へますと、其處に壓力が作用すると何等か影響を受けずには居ないのであります。即ち一物が衝動を受けますと、其處に初めて内部に變化を起すのは物理の原則で、之は皆さん御承知の通りと私は考へます。其の外部的衝動と申しますものは外國との關係であります。御承知の如く徳川時代は鎖國時代で、外國と往來しては決してならぬ。日本人は外國に行く事はならない。大きな船を作つてはならない。貿易は長崎で和蘭人丈に限り貿易をするのだ。之が徳川時代であります。鎖國時代。實を云ひますと、鎖國と申しますけれども、武備の備へを致して鎖國と申したのでは無く、徳川の御威光で以て鎖國を致して居ります。所謂紙上鎖國であります。外國を防ぐ防備をしない。只御威光許りで以て、鎖國と云ふ事を致して居ります。丁度千九百十七年十月のロシアの革命後に於て、ロシアの鎖國と同じ様な状態であります。御承知の如く、千九百十七年以來露國は鎖國を致して居る。五箇年計畫、第二次第三次五箇年計畫と云ふものを國內文で致して居ります。外國人はロシアに行けない。外國新聞も入れない。又ロシア人が外國に行くのも許さ

ない。丁度千九百十七年に五、六歳であつた者が今日大人になり、今日働き盛りとなつて二十五六歳で居ります。世の中は斯う云ふものだ。米は配給でなければ喰へないもの。靴も働かなければ貰へない。靴下も年に三、四足だ。之が世の中だと云ふ風に、五、六歳の頃から教へられる。即ち千九百十七年頃其のまゝで、ずつと大きくなつて居りますから、他との比較をしない。之は今日のロシアである。猪武者。他と比較をしない。徳川幕府の鎖國の制は之と同じ様な事を致して居ります。外國と比較をさせない。國內の制度も同様な理論を以て樹てゝ參つて居るのであります。

併し乍ら、徳川時代には段々外國の勢力が薄々乍ら知れて来る。學問に於きましても、新しい學問が徳川時代の末に出て来るのであります。長野縣に於きましても、私はよく「信濃新學」と云ふ言葉を使つて居りますが、新しい學問が此の地方に澤山出て參つたのであります。松代の佐久間象山先生、上田の赤松小三郎、此等信濃新學の先驅的識者がありますと同様に、全國的に新しく段々出て来る。そして日本人が鎖國と云ふ事で、外國を少しも知らなかつたのが、始めて此の日本の外に、外國と云ふものがあるぞ。強いものがあると、考へを起しました。之が丁度今から二百年位前の寶曆九年。北海道の厚岸と云ふ所がありますが、松前藩の人が厚岸に參りました所

が、赤い着物を着た見慣れぬ異人が其處に舟に乗つて来て居るのを初めて見ました。即ち千島を南下して根室に來つたロシア人である。もう此の時ロシアの勢力はカムチャツカよりずつと南下致して居る時であります。夫から其の後に之は大變だと云ふので、北海道の警備に幕府が注意致して居ります。

寛政年間になりますと、白河樂翁、即ち松平定信が出て、北海道の經營を十分にしなければならぬと考へた。而して防禦として北海道の南、松前、津輕地方の防禦を考へて居ります。昔から北海道にはアイヌが居りますと文思つて居りますから、政治は松前藩に任せて了つて、殆ど知らなかつたのであります。此れは北海道の警備には手薄いと云ふので、今度は幕府自身が北海道の政治をする事になつて居ります。始めは東蝦夷地方を幕府自身治め、次いで西蝦夷地方も幕府の直轄領にする。斯う云ふ風に政治を施します。北海道文ではどうも心配だ。何分にも將軍家の居られる江戸の脚下江戸灣の警備もしなければならぬと云ふので、寛政年間、東京灣の武備に非常に力を注いで居ります。今の千葉縣の富津と、神奈川縣の浦賀、觀音崎の防備は、寛政年間に出來て居ります。軍の人に聞きますと、あの時と今日と、殆ど軍略に變りはないのであると云つて居られる位であります。

斯う云ふ風になつて參りました爲に、兎に角今迄の様な鎖國ではいけない。之は外國が何時來るか判らないのであるぞと云ふ刺戟を日本が受けて來ました。此處に考へさせられたのは、御威光に依つて國を治める事である。吹く風は枝を鳴らさすと云ふ徳川時代であると思つて居りました所の日本人が、之は容易ならぬ事になるぞ。外國の軍艦が來るぞと、此處に始めて日本人の一部に新しい自覺を得て來ました。此處に日本人本來の面目を發揮したのであります。

一つ譬へ話をして見たいと思ひます。昔獅子の子が奥山に居りまして、之が親と一緒に居た。所が獅子の子供でありますが、ハイキングをやつた。所がつい歸り途を失つて人里の方へ迷つて來た。さうすると、人里に近頃子供を失つた所の羊の母親が居りました。夫が獅子の子供を見て、可愛いと思ひまして自分の子供として大切に育て、居りました。其のライオンの子供が、矢張羊の様な氣持になつて、大きくなつたのである。或る時羊の親と、獅子の子供が山の谷に行きました所が、奥山の方から一種異様な、聞いた事もない物凄い獸の鳴聲が聞えて來た。さうすると、今迄羊の子として母羊と一緒に居た彼の獅子の子供が血相を變へて立ち上つて、其のまゝ聲のする方へ向つて、谷を渡り山を越へて飛んで行きました。之は今迄羊の子として飼はれて居つたのが、ライオンの鳴聲を聞くと共に、今迄眠つて居りました所のライオンとしての本能を其處

に發揮致しまして、そして谷を越へ、山を渡つて鑿のする方に飛んで行つた。斯う云ふ話であります。

之と同じである。今迄日本の國は徳川が治めなければならぬ。斯う云ふ風に考へて居ました。家康は偉い人だ。東照神宮は尊崇しなければならぬ偉いお方である。だから此の人の子孫に依つて治められると云ふ風に考へをして、何も知らずに過して居たのです。夫が今外國の船が來るのだ。何時外國に襲はれるかも知れない、と云ふ様な考へが起つて來ました時に、始めて日本人が日本本來の精神を發揮致して來た。此の日本人の本質は外國と違つて居る所であります。

然らば何う云ふ風に、日本人本來の面目を取り戻したかと申しますと、之を一言に申しますれば、皇室に歸一すると云ふ事に歸するのであります。此處に日本の所謂高度國防と云ふ事が本當の場所に立つて來たと思ひます。

今日はよく高度國防と云ふ事を申します。或は飛行機を澤山作らなければならぬ。大砲を作らなければならぬ。斯う云ふ事を云ひます。外國でも澤山作る。アメリカの軍艦の數と日本と比較しても、今でこそ同じ位で大差ありませんが、一年経ちます後では向ふと大差が出来る。故に高度國防と云ふ事は、軍艦を作るとか、或は大砲を作る事許りに依つてのみ現れると申します

が、實は高度國防と云ふ事は日本ではそれ丈では完全で無い。兎に角我國に於ましては、國防と云ふ事と、皇室尊崇の觀念が、同じ頭の中に、同時に結び付か無いと高度國防の境地には達しないものであります。此處が外國より日本の強い所である。此處に外國との違ひが現れて來るのであります。

昔から日本には、我國は神の國であるとの思想がありますけれども、國防關係は、夫と皇室とを結び付けて考へる事でありませぬ。例へば山鹿素水、此の人の書いた海備全策に、

「數千年來今日に至つて、東方に獨立し、天子一姓綿として、其の國を保つ。全世界中に於て、何れの國に比類すべき、實に地球中の一大美事と云ふべし。」

斯う云つて居ります。龜井昱の防海微言にも、

「近來北虜屢々海岸を窺ふ。之犬羊の類にして、堂々たる神明の皇統、何ぞ彼を憂へん。」

とありまして、つまり日本の國は神國であると云ふ事が、高度國防觀念と結び付いて日本人の頭の中に出て居るのであります。

此の事に就いて思ひ當る一つのことがあります。私が未だ青年の時、前の十五代將軍徳川慶喜公の御側で、維新の話を御聞きした時、慶喜公が公卿へ入説の話をされた。其のお話によると京

都の公卿方が攘夷の成否を問はれる。其處で慶喜が「到底さう云ふ事は、今日の日本の力では出来ませぬ。」と答へられた。判つたと云ふ風に返事をされるから、確かに判つたと思つて、又明日行つて見ると、今度は公卿が「いや昨日はあゝ聞いたけれども、日本には大和魂があらう。」と相變らず攘夷論であつた。之には困つたと云はれた。併し攘夷と云ふ精神的のものを以て、國防の中心とします事は、之は誠に結構であると思ひます。

九、國家總動員

今申しました様に、國防策の中に皇室尊崇の觀念を加へて居る。此處が非常に日本の偉い所であると思ひます。此の觀念がありました處に、嘉永の四、五年に米國が日本に使を遣はすと和蘭人から聞いた。併し幕府當路は半信半疑で居つたのに、今度は將軍の膝元、江戸灣の浦賀に四艘の船が來ました。之には非常に驚いた。其の時の落首に一つの諷刺がありました。當時幕府の首腦者の立場には、阿部伊勢守が居た。落首の意味は、「元寇の蒙古が來た時には、伊勢の神風に彼等が驚いたが、今度は伊勢が驚いた。」と伊勢守に言葉をかけてゐるのであります。ペリーが参つた事は大きな問題であります。當時徳川氏の執政方針は、國民の輿論と云ふものを聞いて仕事を

しなかつた。處が其の時阿部伊勢守は、アメリカの大統領ヒルモアの國書を譯して、夫を天下に公表して了つた。而して添書をして國策上、策のある者は身分の如何に係らず、意見を上申せよと達した。嘉永六年七月一日の達しであります。すると多くの人々が意見を出しました。之には非常に色々の意見が出て居ります。一例を申し上げますが、東京灣に注ぐ隅田川の下流に、深川と云ふ所がありますが、其處の材木問屋の主人が意見書を出した。其れ以前でありますと、政治上の事を述べる事はありませぬ。農商などで政治を批評する事は出来なかつたのであります。此處は天下晴れて、輿論を採られるのであるから、其の深川の材木問屋が建白書を出した。其の説には「東京灣の洲口隅田川の川口に木柵を作つて置けば船が通らない。夫には私の所の材木をどうかお使い下さい。」斯う云ふ事を云つて居ります。夫から料理屋の主人が意見書を出して居る。アメリカの船が浦賀に四艘來た事で、大層公儀では心配をして居られますが、決して御心配には及びません。私の方は料理屋を致して居るので、藝者が居りますから、夫達を私が連れ、酒を持つてアメリカの船に行きます。そうすると、長い間の航海でありましたから、其の船中の水兵共は大いに喜んで酒を呑んで寝て了ふだらう。其の時に私が男を連れて行つて、水兵共を殺して了ふと、四艘の船は丸儲だ。何も恐るゝ事はない。」斯う云ふ意見を出して居ります。

今日統制の事を屢々云ひますが、嘉永六年七、八月の建白書中にも、第一に物資の統制をしる。しなければならぬと云ふ建白書を出して居ます。梅干であるとか、麻繩であるとか、草履、さう云ふ様なものを總てを統制しなければならぬ。殊に梅干などは一日で出来るものではないから、梅干、味噌、醤油など貯へて置く覺悟を致さなければならぬ。梅干の統制は今日はないけれども、其の時は斯う云ふ事迄も考へて居ります。

夫から今日こそ、國土經營と云ふ事を云ひますが、此の時の建白書にも之を云つて居ります。「兎に角日本の國は軍艦がないのであるから、外國船が來ると國內の運送は一日で止まる。即ち海上封鎖に會ふ。之は覺悟しなければならぬ。物資の運搬が出来なくなる。其れに對する準備を致して置かなければならぬ。夫から戦場地帯を豫め定め、人民に立ち退を命じて戦場地帯を定めなければならぬ。」動員計畫から見ると、非常に必要な意見もある。夫から一家では職能を取り調べる。之も嘉永の建白書に出て居ります。江戸に武藝師範を致して居る者とか、其等を調査してゐて、一朝事ある際には其等を召集しなければならぬ。所謂職能の統制と云ふ事が必要であると、斯う云ふ事を云つて居る。

夫からお寺にあります所の釣鐘、之を鑄潰して大砲を作らねばならぬと、之は安政年間に太政官符として發布せられました、お寺の鐘が收められました。次に又今の様に社會階級を區別してはいけないと云ふ建白書がある。町人であれ、百姓であれ、外國に對して見れば等しく皇國の民である。階級を平等にしなければならぬと建白書を出した。斯う云ふ様な大問題の建白を致して居る者もあるのであります。

夫から今日でも總動員と云ひますけれども、嘉永六年ベルリが参りました時には、同じ事を國の總力と云ふ名稱で考へて居る。國力と云ふものを集めなければならぬ。所謂總力を發揮せねばならぬと云ふ意見もあるのであります。斯う云ふ風に、所謂今日の動員と云ひ、統制を主として議論を致して参つて居るのであります。之は徳川時代の末である。而して此の國家總動員を完遂するに當つて、思想的指導原理は何かと申すと、それは攘夷の旗印であります。

果して然らば、外國人に對して攘夷が實際出来るのであらうかと云ふと、之は問題であるのですが、之は出来ると思つて居るらしい。けれども外國に對して戦争は出来ないのである。此の矛盾に就いて水戸の學者會澤安の新論などには、

「攘夷が出来るか出来ないか判らないけれども、兎に角人を高きに追ひ上げて、下から梯子を取る様なものである。さうすると全身にある丈の力を出すことが出来るのだ。此の力がほしい

のだ。夫が攘夷である。」

とも云つてゐるのでありますが、つまり夫であります。此の理屈を考へて居つた様であります。でありますから、愈々明治維新になりました、徳川幕府が倒れて終ふと、今迄の攘夷と云ふ事は變つて終つた。而して廣く會議を興して萬機公論に決せられる。又知識を世界に求めて大いに皇基を振起せられる事となつた。つまり明治維新が出来ると共に、攘夷思想と云ふものは一度に變つて、開國となつた。

十、海外進出論

今日の時勢を申すではありませんが、兎に角昔は攘夷を標榜し、之に總ての人力を集注して、全力を國防に据置いてゐた。其の集まつた國力を一度に、或る一方向に向けて行く。此の事が今日の對外政策の根本力を爲して居ると、私は考へるのであります。

兎に角戰爭をするのだと、非常に力を貯めて置いて其の力を次の時代の推進力としたのが明治時代の第一歩であります。然らば幕末時代は凡て皆攘夷かと云ふと、さうではないのであります。中には外國と交際をしなければならぬと論じて居ります人があります。而してそれが寧ろ進

んで日本人が外國に行かなければならぬと論じて居る人もあります。

佐藤信淵の議論には、

「今日を見ますと、どうしても支那を保全して、日本の一つの防禦線としなければいけない。支那と日本が手を握つてそして西洋の勢力を防がなければならぬ。云々。」

と斯う云ふ事が佐藤信淵の議論の中に出て居ります。

夫から橋本左内は、

「英國とロシアとは、日本よりすると何れと手を握るべきか。英國と手を握るべきか。ロシアと手を握つて英國を防ぐべきか。」

と云ふ議論を安政四年に致して居る。而して

「寧ろロシアと手を握つて英國を防ぐ方が日本の爲に道理だ。」

斯う云ふ議論をして居ります。尙大きな議論を致して居る者があります。安政二年今日より逆算して八十五年前、大阪に居りました廣瀬旭莊と云ふ學者が大きな議論をして居ります。之は非常に大きな議論であります。之を申しますと、丁度今日の狀態であります。其の意味を申しますと、

「西洋人の説に、天一國を生ずれば其の傍に多少の島を以て之に附隨す、と云つてゐる。我國は邦地の狭きの割に、人の衆き事は宇内無雙である。然れば自分の國の他に、諸島を併する様に天より授け玉ひしならん。」

と海外發展の天理に叶つてゐることを述べまして、更に言葉を續けて、

「王室の時は、西北は朝鮮を制し、東北は肅慎を馭せり。然れば毛人は勿論の事と察せられたり。今は其の時より民口の多き事數倍せり。東北は毛人より山丹、カムチャツカ地方に至り、南は琉球、西南は臺灣、ルソン、ボルネオ、スマトラ等を管轄して後、我國の形體成就するなり。」

即ち南洋、東印度諸島を管轄して而て後我國の恰好が出来上るのであると。斯う云ふ事を安政二年の建白書に云つて居ります。

然るに、

「夫が行はれて居ない。と云ふのは、畢竟は船舶の利未だ開けざる故である。此の後次第に船舶開けたれば、必ず東北、西南の諸島を兼併するの日あらん。昔第一にカムチャツカの地方を拓かなかつたのは惜む可きである。彼の地アメリカに近し。彼の地手に入らば、早晚アメリカ

も版圖に入るべきか。」

と斯う云ふ風に、國防論が餘程進んで參つておつたのであります。明治になります前に、海外發展思想があつた事は之で判るのであります。

十一、東西勢力の交錯

既に申上げました如く、明治初年には、世界各国も近くに迫つたのでありますから、國內情勢から申しますと、心配は非常なものであります。

朝鮮の問題にしても、明治初年から既に起つてゐました。如何しても日本は此處に力を加へなければならぬと云ふ論があります。處が支那の方から申しますと、「朝鮮は自分の國の屬國である。」と云ふ論でありまして、そんな考へを持つてゐるのでありますから、日清の衝突は免れませぬ。そして明治二十七、八年日清戦争が起ります。之は皆さんが既に御聞きになつて、お判りになつて居ると思ふのであります。當時何うしても日本は、朝鮮を支那から助け出さなければならぬと云ふ議論がありました。其の日清戦争の前に國內問題として起つたのは、御承知の如く征韓論。此れは岩倉大使等一味、海外を見て來ました者には、誠に亂暴の様に考へられて、征韓論が

行はれない。之が爲明治十年の戦争になります。其の前に西郷先生は陸軍大將の重職の辭表を出して、明治六年國の方へ御歸りになつて、武村で百姓をして居られる。斯う云ふ時勢になりました。十年戦争になつて居ります。朝鮮の方を放つて、他に日本の發展と云ふものは出来ないの
あります。

日清戦争の時に、今日で申します通譯官でありますが、通辯。又難しい言葉では諜報係り。支那人の服装をして各地に入り込んで日本に報告させる。斯う云ふ様な者が澤山あります。例へば明治二十七、八年頃、日本人の山崎、藤崎、鐘崎と云ふ人が通譯官として出向されました。此の人達は金州城外に於て支那兵に殺されました。其の人に贈位をして欲しいと云ふ事を、東亞同文會の幹事連中が話をされました。其の時に調べますと、待遇官としての位置が低い。何故に待遇が低いのかと、同志の方に尋ねました時に、或る人が斯う云ふ事を云つた。「成程日清戦争の場合に待遇に就いて尉官相等官にするか。或は下士官にするか、種々議論がありました。併し我々の同志は我軍より先に參つて探偵するのであるからして、何うで生命はないものだ。であるから死を覺悟して行く以上、少佐であらうが、何であらうが何でも宜敷ではないか。斯う云ふ氣持で我々は皆行つたと。」誠に尊ぶべき精神であると思ふのであります。

日清戦争に於て日本が勝つて、夫から日露戦役。あの大きなヨーロッパの大國でありますロシアを、日本は小さな國であり乍ら打破つて了りました。遼東から追拂つて了つた此のことは、東亞に於る非常に大きな問題となつたのであります。

十二、今日の問題の由來

ロシアに勝つたと云ふ丈でない。今から十年前、私が英國に参りました時、英國に於まして印度の獨立運動問題が起つて居りました。圓卓會議が開かれて居りました。其の時に座長サイモンの報告書を見ますと、「印度の人間が、今日あれ丈反英の氣持になり、そして獨立する考へを何時から興したか、又何が原因であるかと云ふと、日本がロシアの戦争に勝つてからである。東亞の諸民族は、日本が勝つた事に非常に刺戟を受け、そして力を得て、勃興する様になつた。之が今日印度の諸民族の反英思想を抱く基である。」と述べて居る。

夫から私が丁度船に乗つて行きます時、セイロン島のコロンボに上陸致して、或る晩寺院を見まして、庫裡に参りまして、此處で注意を引きましたのは、大阪毎日新聞か、大阪朝日でありましたか、新聞の附録に掲げました所の、明治天皇の御肖像を見ました事であります。何故に斯う

云ふ所に明治天皇様の御肖像があるのかと聞きました所、領事さんが「何れ後で調べて置きます。」と申して居られました。後で報告に依りますると、日露戦争の後になつて、セイロン島の島民が、明治天皇様を尊敬をする様になつたので、其の時留學致して居つた所の坊さんが納めたのである。斯う云ふ事を報告されて居ります。

誠に日露戦争は、獨り日本の歴史に於て許りでなく、東洋の歴史に非常な影響を及ぼして居ります。殊にアメリカが日露戦争の媾和を斡旋致しました事に就きまして、之はアメリカの歴史に於ても非常に忘れる事の出来ない、一つの史實であります。つまり今迄モンロー主義を建前と致して居りまして、そして他國の事には干渉しないと云ふのがアメリカの建前でありましたのが、夫が滿洲問題を中心として居ります日露戦役に媾和の取持を致した事は、今日の形勢、特にルーズベルトが致した點に於て非常に意義があります。

日露戦争に日本が勝ちまして以來は、日本は東亞の盟主になつて來ます。夫と共に日本に對して、日本が支那をどうかするのではないかと云ふのが、歐米諸國に非常な心配の種になつて起つて來たのであります。であるから明治三十九年結ばれました日米の覺書であるとか、或は明治四十年のロシアとの協約であるとか、同年出來ました日佛協約、斯う云ふものを見ますと、日本と

ロシア、日本と英國、日本と米國の協約でありますけれども、其の條約の内容目的は、何れも支那の領土保全、支那の主權を認め、領土をお互ひに侵さず、機會均等にしよう云ふのが此等諸協約の骨子である。つまり東洋の問題に對して、日本と云ふものを押のけては、之は仕事が出来ないと云ふ所迄、日本が進んで參つて居るのであります。

斯う云ふ風に盛になつて參りますと、此處に、日本の力と世界の力と云ふものとは、衝突をしなければならぬのであります。諸國の勢力が東洋に伸びて參りました歴史を僅かの間に申上げるのであります。御承知の如く羅針盤が発見されました以來、航海は盛になつて終つたのであります。

十六世紀の頃に、英國人が希望峯を廻つて、そして印度のゴワ島に到着致しました。千五百十年ポルトガル人がモロッコ、スマトラに參り、スペイン船は西印度諸島の方からフィリピンに參りました。次いで英國、和蘭、佛國等が東印度會社を作つて東洋に進出致し、馬來半島に來るジャンク貿易を見て、更に支那海に進出して參りました。此の支那海に進出の結果と致しまして所謂南蠻船が平戸、長崎、豊後地方に參る様になつて來ました。又支那では、廣東、澳門、寧波へと進みます。

殊に印度を英國が取りまして以來、英國の富と云ふものは非常に殖へました。全く東洋によつて得たのであります。夫であるから今日執念深くやつて居るのも無理はない。

さう云ふ情勢にありました、其の頃支那は此等歐羅巴人に對して如何考へて居るかと思はしますと、依然として支那が世界で一番偉い。中華の國である。國內には非常に富がある。支那の皇帝は世界の王である。支那人以外は野蠻人だと思つて居ります。故に對等でお互ひに正當な貿易をするのは厭だ。それよりは欲しいなら恵んでやらうと云ふ建前であります。自分が一番偉いと思つて居る。故に支那の方に貢物を持つて來い。貢物を持つて來れば其の返禮に物を賜はると云ふ事で、何うしても相互貿易はしないと云ふ建前で居ります。さう云ふ様な考へで英國に對して居つたのが、後になつて此の考へが全く一變をしたのは阿片戦争が起つてからであります。丁度今から百年前阿片戦争が始つて英國は軍艦で定海を占領し、遂に支那が負けて南京條約を結んだ。此の時支那人は世界中に俺と對等の諸國があると知りました。之と反對に始めて歐羅巴諸國は、支那に對する態度を一變致して強く出て來初めたのであります。斯う云ふ事になつて參つて居りますから、丁度日本が大陸の方へ進んで參らうと云ふのと、歐米人が支那を自分が取らうと思つて來ましたのが、茲に大衝突が起つた今日の時世になつて來て居るのであります。

十三、國民の覺悟

今日、日本はイギリスとか、アメリカとか、オランダとか、支那とかA B C Dの國々に包圍されて了つて居ります。斯う云ふ風に歴史を見て來ますれば、何うしても斯う云ふ様な情勢に相成ることは勢の向ふ所當然であります。唯此の上は情勢をよく轉換させて、そして難局を乗り切つて行かなければならぬ。それより他に道は無いと思ひます。

斯う云ふ大勢の推移からして明治時代をよく見ますと、非常によく由つて來る所が判つて來るのであります。其の他明治時代に於る政治、即ち今日の立憲政治の由來に就ましても述べなければなりません。此の題目は先年私が長野縣師範學校で十二時間に亘り講義を致しましたのが、縣の方で印刷になつて残つて居りますから御覽願ひたいと思ひます。百頁位であります。

斯う云ふ風に、今日日本が世界的に雄飛致しまする其の基礎を御創り下されたのが、明治天皇様であります。そして明治時代と云ふものは、實に今日の日本を此の世界的に發展致しまする原動的胎動の時代であります。

今から十年前は、誰でありまして、今日の様にロシアの國境や佛印に國旗を樹てるであら

う。萬里の長城の上に日本の國旗が翻るであらうなどとは誰も考へを持つて居なかつたらうと思ひます。支那の話には邯鄲夢の枕。さも唐、天竺の話の様であり、孫悟空の話など夢物語でありましたが、其れを今日本人が其等の地を舞臺と致して居ります。斯う云ふ風に、非常に長足の進歩を遂げた國、之程大きく發展した國は世界に於てなかつたらうと私は思ふのであります。日本の國の今日の發展は、明治時代と云ふ一つの大きな基礎が出来たからだと私は考へるのであります。世界の輿論の中心を爲します所のロンドンタイムスも、明治天皇に對し奉り、「實に偉大なる時代に於る、偉大なる統治者であらせらるる。」と書いて居ります。

明治天皇様は實にお偉いお方であらせられた事を我々は忘れぬと云ふ事が大切であります。即ち明治時代の追憶が大切であります。そして夫で國力を統一しなければならぬと思ふのであります。

當長野縣は、明治天皇様の御事蹟の顯彰に非常に力を盡くされて居られます。誠に明治天皇様を敬慕し奉る緣故機會が多く與へられてゐますが、その折々に、今日の非常難局を乗り切る新しい力を授けられて行かれるだらう。斯う私は考へるのであります。時間も無いので定めし話の盡きない所もあつたであらうと思ひますが、「明治天皇と其の時代」と題しまする講演は之で終りと致します。(終)

昭和十七年二月二十六日印刷 (非賣品)
昭和十七年三月三日發行

編纂並 長野市役所内

發行者 長野市聖徳記念會

代表者 石垣倉治

印刷者 長野市妻科四六

印刷者 大日方利雄

長野市南縣町六五七

印刷所 信濃毎日新聞株式會社

終

